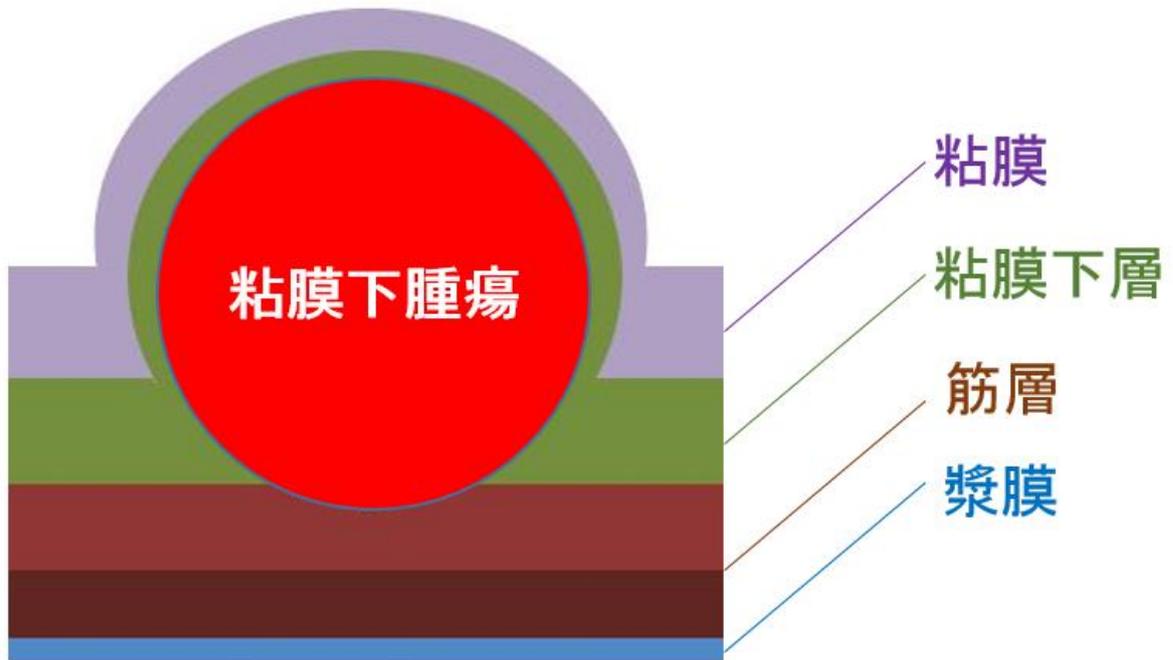
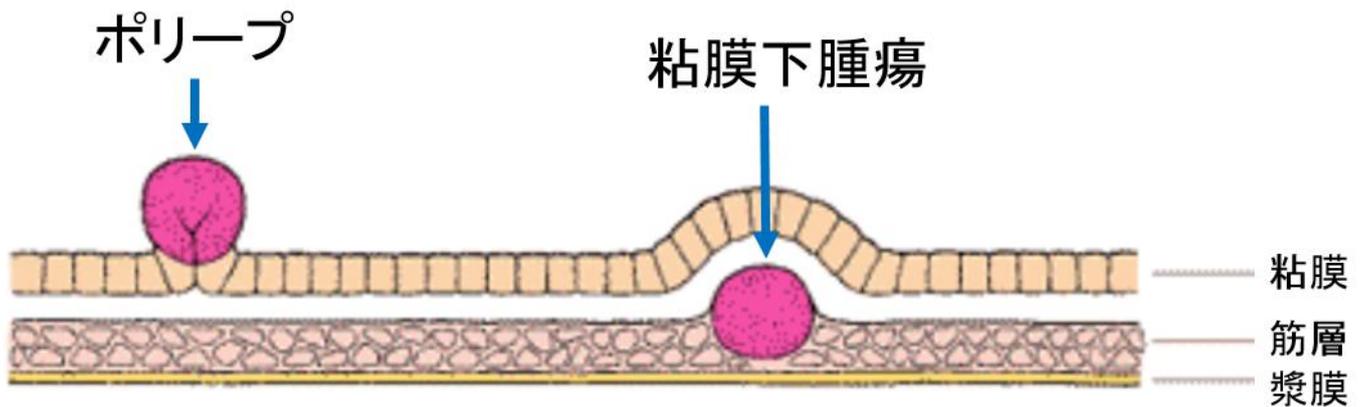


# 胃粘膜下腫瘍とは

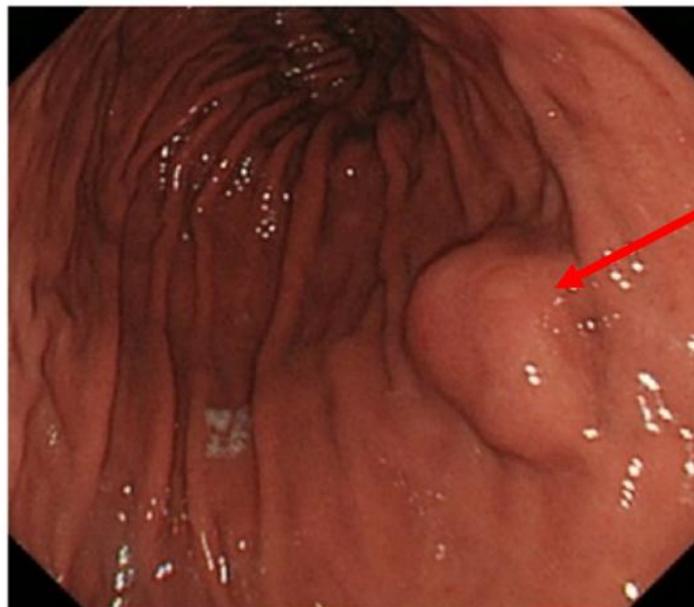
粘膜下腫瘍とは、文字通り粘膜の下にできる腫瘍です。すなわち、粘膜よりも深い胃壁内（粘膜下層、筋層、漿膜下層など）に発生します。



そのため、粘膜にできる**ポリープ**や**ガン**と異なり、正常の粘膜におおわれたまま胃の内腔に突出します。

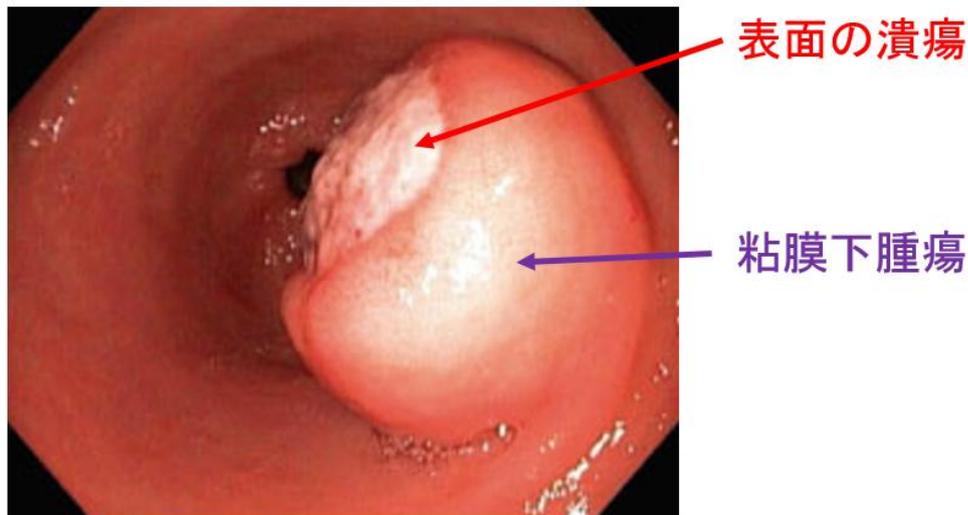


診断は、胃X線や内視鏡検査でなされます。



粘膜下腫瘍

普通、症状はありません。腫瘍が大きくなり表面に潰瘍ができると、腹痛や出血などを起こすことがあります。



腫瘍の種類は筋肉由来のもの、脂肪の塊、血管・リンパ管由来のもの、神経由来のものなどです。

多くは良性ですが、**一部では悪性度が高く、転移をきたすこともあります。**

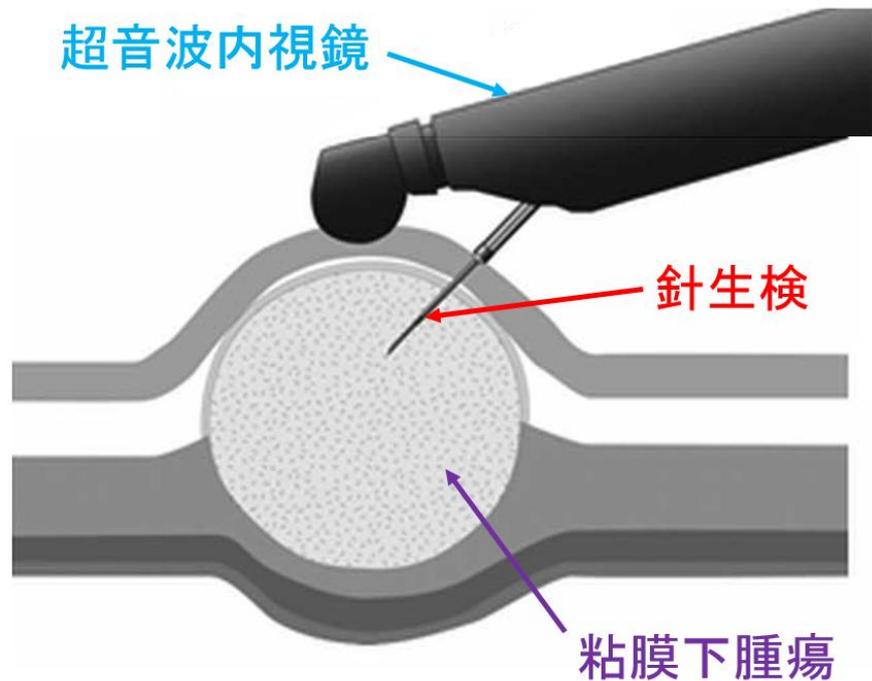
## 補 足

胃粘膜下腫瘍には GIST (gastrointestinal stromal tumor)、リパ<sup>o</sup>腫、平滑筋細胞由来の腫瘍、神経系腫瘍、脂肪細胞由来の腫瘍、血管内皮細胞由来の腫瘍、基底細胞由来の加チノイド<sup>o</sup> などに加え、迷入腺、顆粒細胞腫などがあります。うち、GIST の一部、悪性リパ<sup>o</sup>腫、脂肪肉腫、血管肉腫、加チノイド<sup>o</sup> の一部では転移をきたすこともあり、悪性度の高いものもあります。

### ◎診断

病変が粘膜に露出している場合には、病変の一部を採取して（生検）病理組織診断が可能です。

病変が正常粘膜に覆われている場合は、超音波内視鏡を使って針生検を行う必要があります。



## ◎ 治療

一般に、大きさが **2cm 以下** の場合には年 1-2 回の内視鏡検査で定期的な観察を行い、**2~5cm** の腫瘍には腹腔鏡補助下（腹部に小さな穴をあけ

て行う)に局所切除を行い、診断治療を行うことが推奨されています。大きさが5cm以上の腫瘍では悪性腫瘍である可能性が多いために手術を行うことが原則です。このような症例では、開腹して切除することが勧められています。小さい腫瘍でも経過観察中に大きさや形態に変化が認められた場合には手術の適応となります。